

著 吉 茂 藤 齋

集 歌 選 自

螢 の 朝

篇一第 叢歌短表代現
幀裝伯画友恒田森

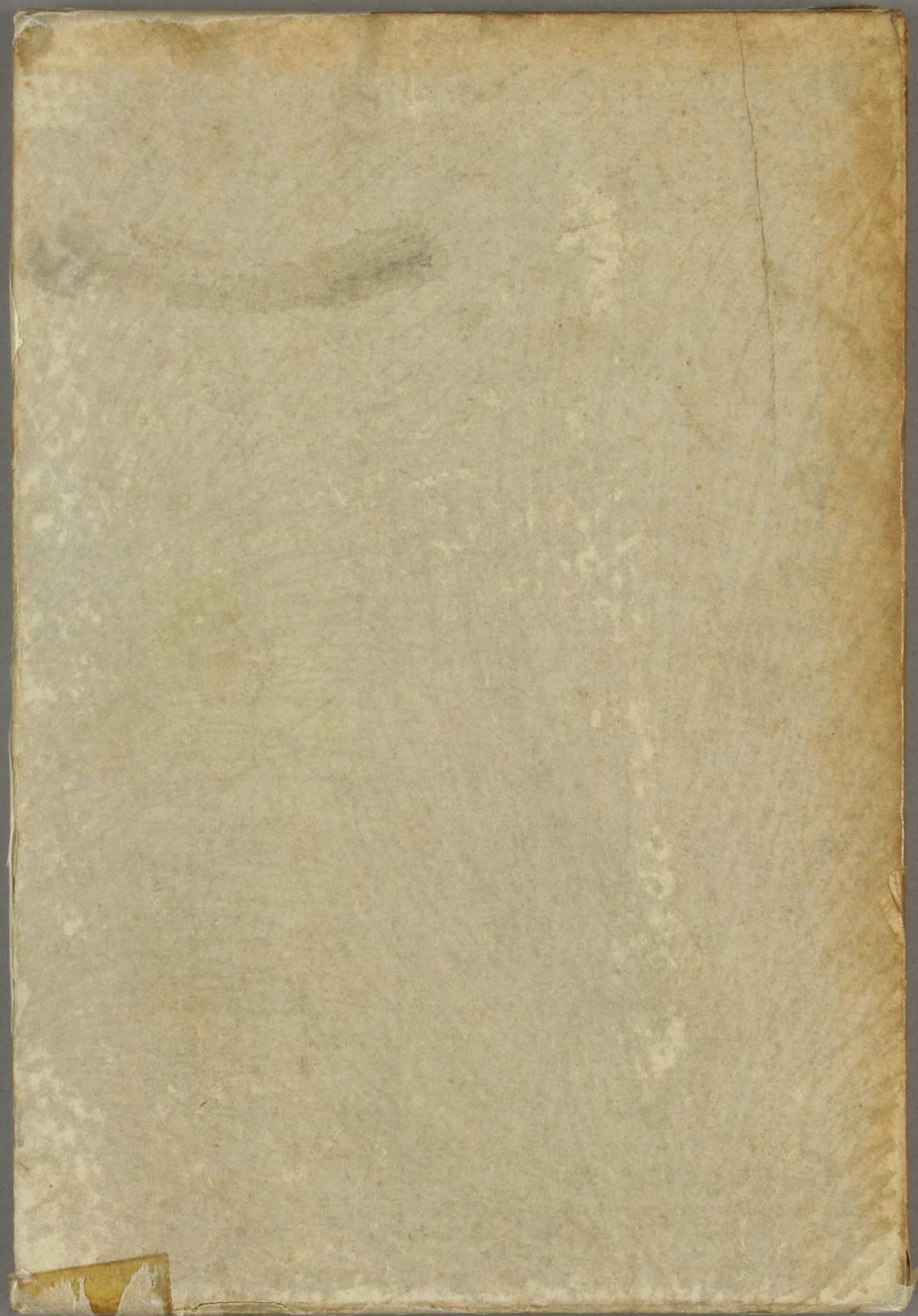
版 社 造 改

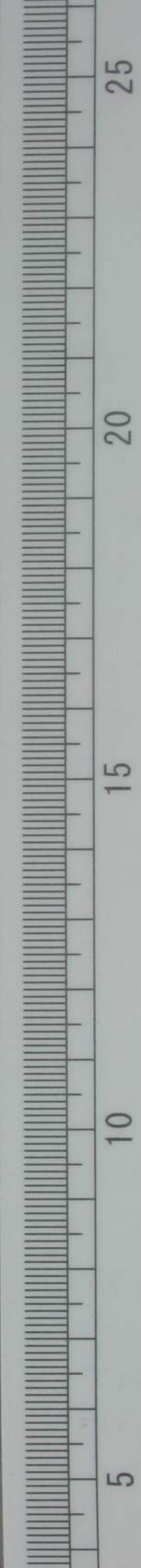
自選
歌集

朝
の
螢

齋藤茂吉著

改造社





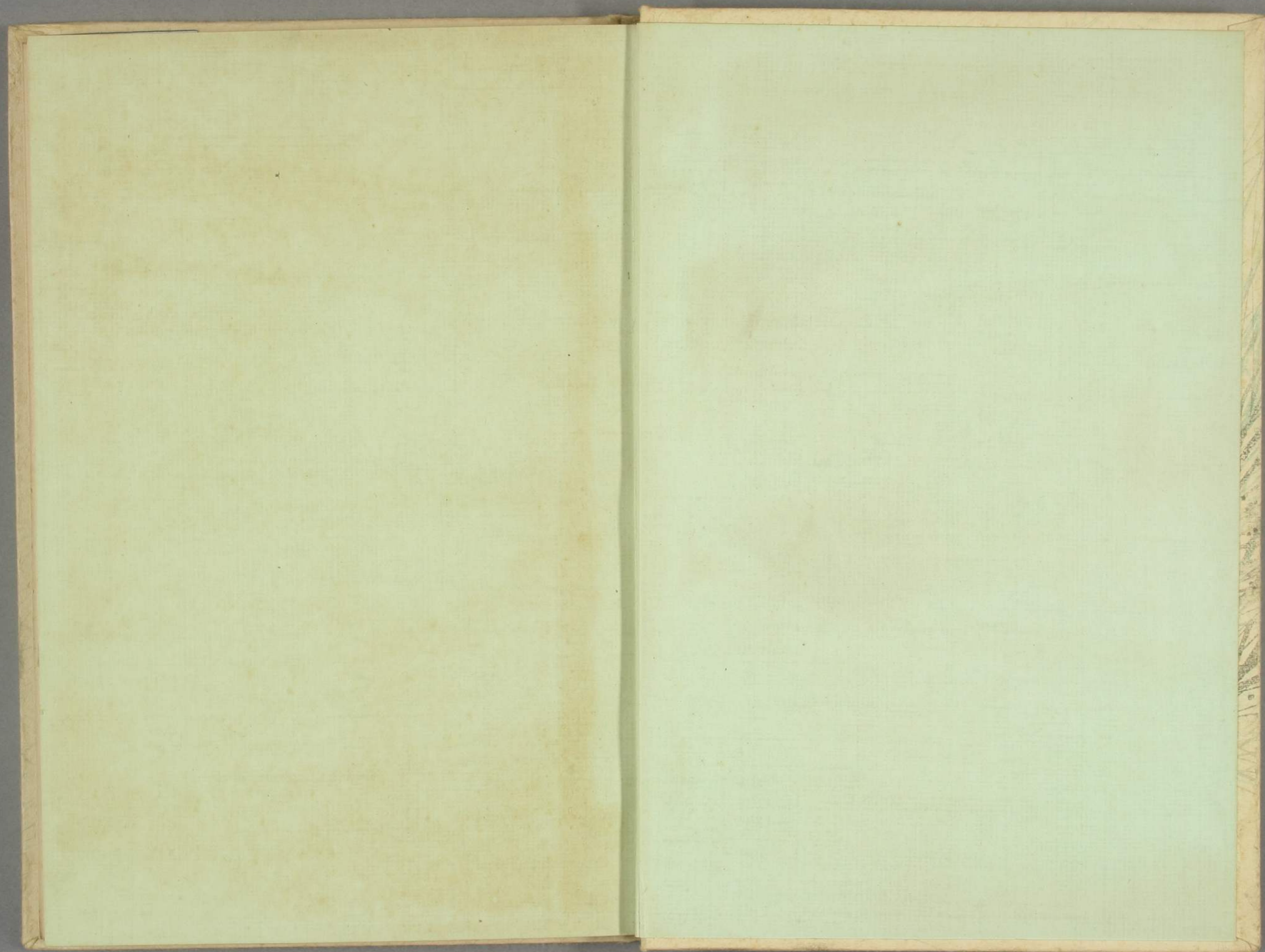
自選
歌集

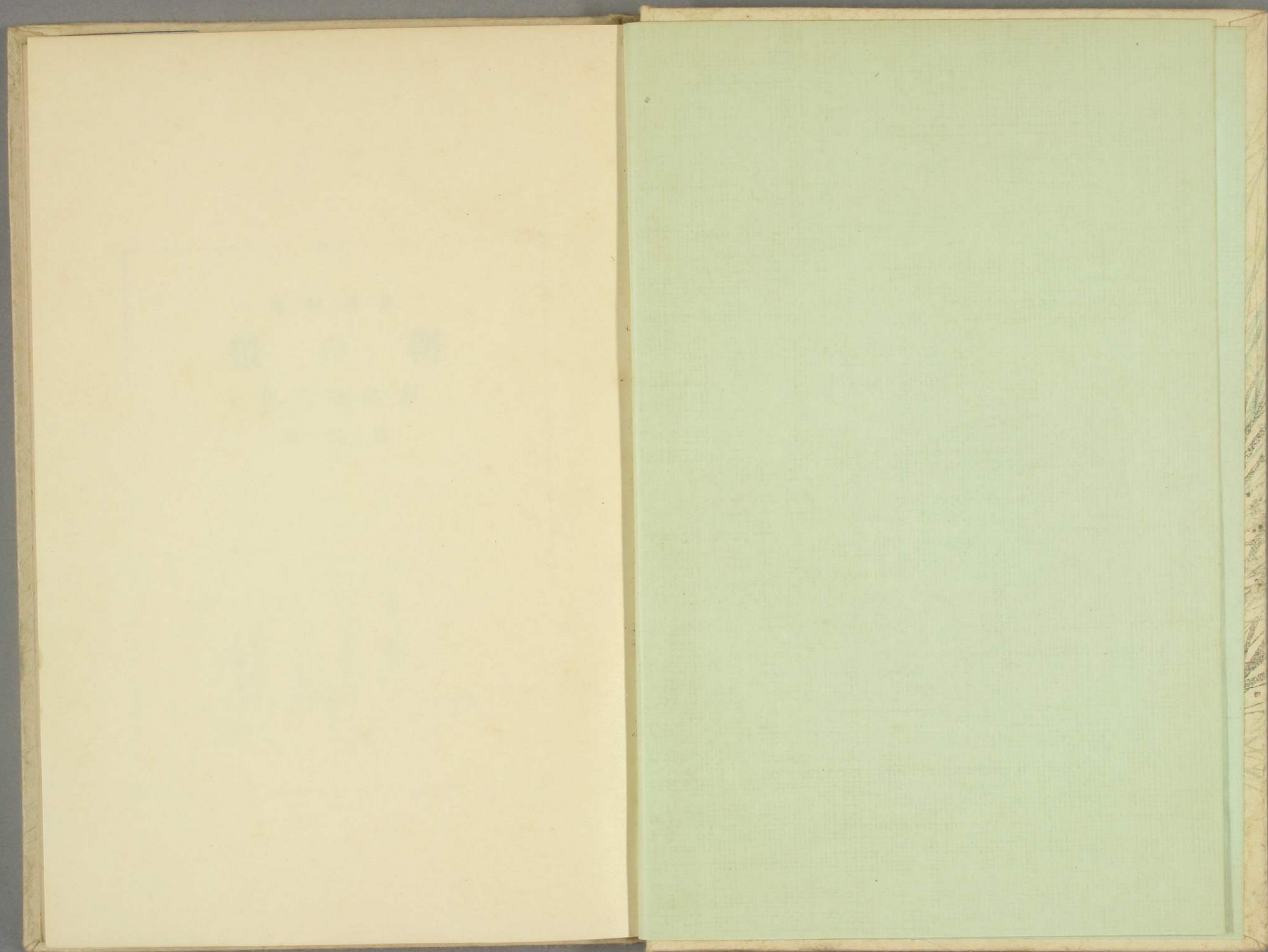
朝
の
螢

齋藤萬吉著

三友社





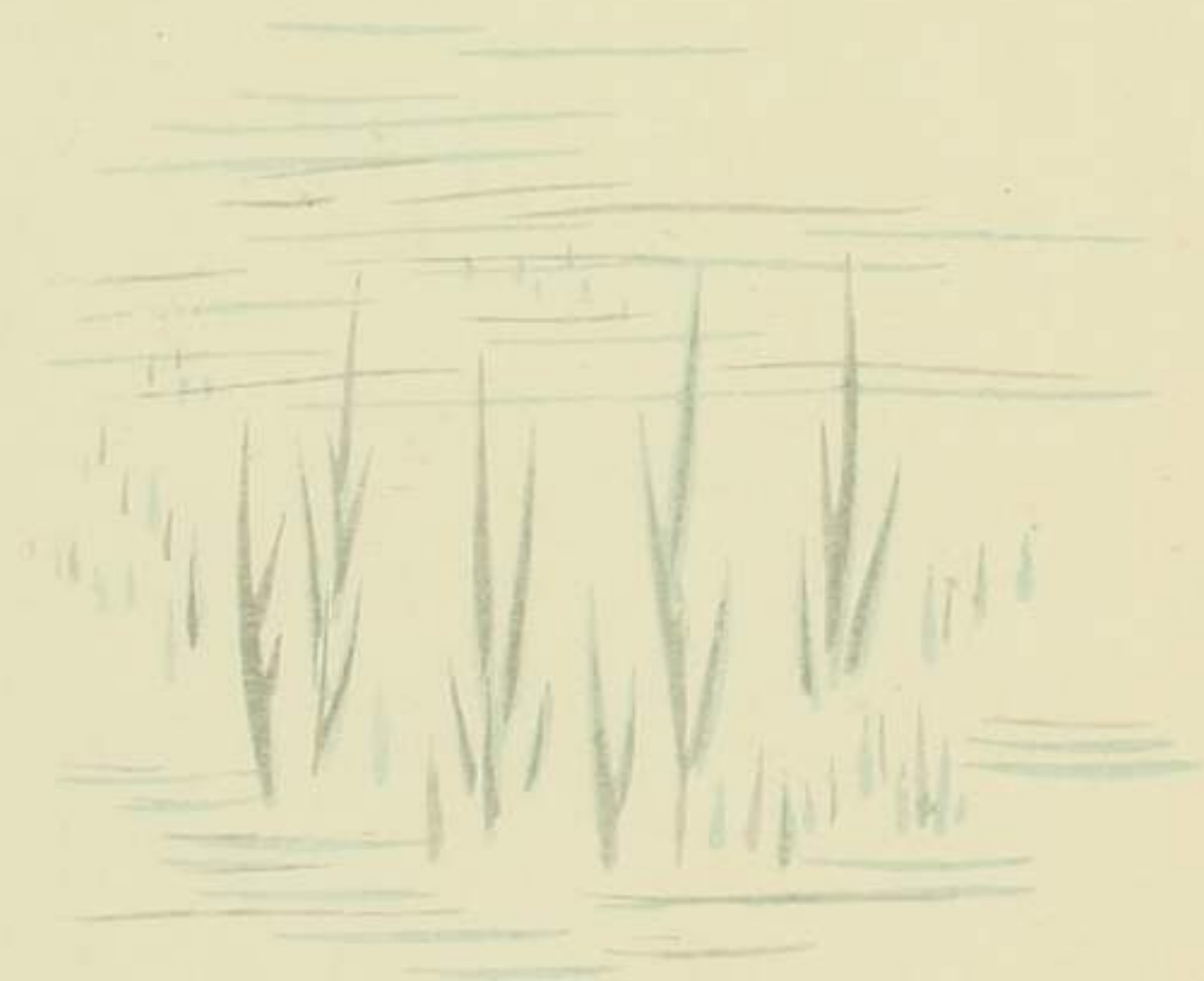


自選歌集

朝の螢

齋藤茂吉著

改造社



朝の螢目次

折々の歌	(大正元年、二年作) 録四十四首	一
相聞	(大正二年作) 録十一首	一六
死にたまふ母	(大正二年作) 録二十八首	二〇
折にふれ	(大正二年作) 録八首	三〇
悲報	(大正二年作) 録十首	三三

朝	螢	集 <small>(大正二年、三年作)</small>	……	三七
冬	夜	集 <small>(大正四、五、六首作)</small>	……	五
祖		母 <small>(大正四、五、六首作)</small>	……	五
淺	茅	集 <small>(大正五、六、七、八、九首作)</small>	……	七
寒	蟬	集 <small>(大正六、七、八、九首作)</small>	……	九
箱	根・長	崎 <small>(大正六、七、八、九首作)</small>	……	二五
卷末の小言	……	……	……	二三

折々の歌

大正二年作

しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして
路見ゆるかな

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき
歩みなりけり

満ち足らふ心にあらぬ谿谷つべに酢をふける
木の實を食むころかな

山遠く入りても見なむうら悲しうら悲しとぞ
人いふらむか

紅蕈の雨にぬれゆくあはれさを人に知らねず
見つつ來にけり

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむと
思ひて飯はむ

雨ひと夜さむき朝けを目の下の死なねばなら
ぬ鳥見て立てり

猫の舌のうすらに紅き手ざはりのこの悲しさ
を知りそめにけり

ほのかなる茗荷の花を目守る時わが思ふ子は
はるかなるかも

をさなごの遊びにも似し我がけふも夕かたま
けてひもじかりけり 研究室二首

屈まりて脳の切片を染めながら通草のはなを
おもふなりけり

みちのくの我家の里に黒き蠶が二たびねぶり
目ざめけらしも 故郷三首

みちのくに病む母上にいささかの胡瓜を送る
障りあらすな

あきなぐさに唇ふれて歸りしがあはれあはれ
いま思ひ出でつもの

けふもまた向ひの岡に人あまた群れゐて人を
葬りたるかな

何ぞもとのぞき見しかば弟妹らは龜に酒をば
飲ませてゐたり

うけもちの狂人も幾たりか死にゆきて折をり
あはれを感じずるかな 狂人守三首

ゆふされば青くたまりし墓みづに食血餓鬼は
鳴きかゝるらむ

七夜ねて珠ゐる海の香をかげば哀れなるかも
この香いとほし

くれなるの三角の帆がゆふ海に遠ざかりゆく
ゆらぎ見えずも

いちめん唐辛子あかき畑みちに立てる童の
まなこ小さし

草の實はこぼれんとして居たりけりわが足元の
日の光かも

秋づきて小さく結りし茄子の果を籠に盛る家の
日向に蠅居り

土のうへに赤棟蛇遊ばずなりにけり入日あか
あかと草はらに見ゆ

霜ふればほろほろと胡麻の黒き實の地につく
なし今わかれなむ

ひとりなれば心安けし谿ゆきて黒き木の實も
食ふべかりけり

おのづからうら枯るる野に鳥落ちて啼かざり
しかも入日赤さに

いのち死にてかくろひ果つるけだものを悲し
みにつゝ峽に入りつも

くろぐると圓らに熟るる豆柿に小鳥はゆきぬ
つゆじもはふり

藏王山に雪かも降るといひしときはや斑なり
といらへけらずや

狂者らは Paederastio をなせりけり夜しんしんと
更けがたきかも

ゴオガンの自畫像みればみちのくに山蠶殺し
しその日おもほゆ

をりをりは脳解剖書讀むことありゆる知らに
心つつましくなり

水のうへにしらじらと雪ふりきたり降りきた
りつゝ消えにけるかも

身ぬちに重大を感じざれども宿直のよるにう
なじ垂れるし

かりそめに病みつつ居ればうらがなし墓はら
とほく雪つもる見ゆ

現身のわが血脈のやや細り墓地にしんしんと
雪つもる見ゆ

あま霧し雪ふる見れば飯をくふ囚人のころ
われに湧きたり

わが庭に 鶯あひるら啼なきてゐたれども雪ゆきこそつもれ
庭にもほどろに

雪ゆきのなかに日ひの落おつる見みゆほのほのと懺悔えんげの
こころかなしかれども

家いへゆりてとどろと雪ゆきはなだれたり今夜こよひは最も早はや
幾時いくときならむ

あまつ日ひに屋上やうじやうの雪ゆきかがやけりしづごころな
きいまのたまゆら

しろがねのかがよふ雪ゆきに見み入りつつ何なにを求もとめ
むとする心こころぞも

ひんがしはあけぼのならむほそほそと口笛くちふえふ
きて行く童子どうじあり

相聞

大正十一年
録首作

なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星
さへあかからなくに

ほのぼのと目を細くして抱かれし子は去りし
より幾夜か経たる

愁ひつつ去にし子ゆゑに藤のはな揺る光さへ
かなしきものを

しんしんと雪ふりし夜に汝が指のあな冷たよ
と言ひて寄りしか

あさぼらけひとめ見しゆゑしばだたくろき
まつげをあはれみにけり

おもひ出は霜ふる谿に流れたるうす雲の如く
かなしきかなや

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなり
われは寝なくに

夏されば農園に来て心ぐし水すましをばつか
まへにけり

この心葬り果てんと秀の光る錐を壘に刺しに
けるかも

念々にをんなを思ふわれなれど今夜もおそく
朱の墨するも

この雨はさみだれならむ昨日よりわがさ庭へ
に降りてゐるかも

死にたまふ母

録大 二正 十二年 首作

はるばると薬くすりをもちて來こしわれを目ま守りたま
へりわれは子こなれば

寄より添そへる吾われを目ま守りて言いひたまふ何かいひ
たまふわれは子こなれば

長なが押おしなる丹にぬりの槍やりに塵ちりは見みゆ母ははの邊への我わが
朝あさ目めには見みゆ

山やまいづる太陽たいやう光ひかりを拜かがみたりをだまきの花はな咲さき
つづきたり

死いに近ちかき母ははに添そ寝ねのしんしんと遠とほ田だのかはづ
天あまに聞きゆる

桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ
母呼びにけり

死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたり
といひにけるかな

春なればひかり流れてうらがなし今は野のべ
に蝶子も生れしか

死に近き母が額を撫りつつ涙ながれて居たり
けるかな

母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲し
もよ蠶のねむり

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし
乳足らひし母よ

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は
死にたまふなり

いのちある人あつまりて我が母のいのち死行
くを見たり死ゆくを

ひとり来て蠶のへやに立ちたれば我が寂しさ
は極まりにけり

檜若葉てりひるがへるうつつなに山蠶は青く
生れぬ山蠶は

日のひかり斑らに漏りてうら悲し山蠶は未だ
小さかりけり

葬り道すかんぼの華ほほけつつ葬り道べに散
りにけらずや

あきなぐさ口あかく咲く野の道に光ながれて
我ら行きつも

わが母を焼かねばならぬ火を持ってり天つ空に
は見るものもなし

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母
は燃えゆきにけり

さ夜ふかく母を葬りの火を見ればたゞ赤くも
ぞ燃えにけるかも

はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天
のいつくしきかも

ひた心目守らんものかほの赤くのぼるけむり
のその煙はや

灰はいのなかに母ははをひろへり朝あさ日ひ子ののぼるがな
かに母ははをひろへり

落おちの葉はに丁てい寧ねいにあつめし骨ほねくづもみな骨こつ瓶びんに
入いれしまひけり

火ひを守まもりてさ夜よふけぬれば弟あとうとは現ま身しみのうた悲かな
しくうたふ

うらうらと天てんに雲ひばり雀りは啼なりのぼり雪ゆき斑まだららなる
山やまに雲くもゐず

どくだみも薊あざみの花はなも焼やけゐたり人ひと葬はふ所りの天あめ明あ
けぬれば

*
**

折に觸れ

大正二年作

どんよりと空は曇りて居りしとき二たび空を
見ざりけるかも

わが體にうつうつと汗にじみゐて今みな月の
嵐ふきたつ

蚊帳のなかに蚊が二三疋ゐるらしき此寂しさを
を告げやらましを

ひもじさに百日を経たりこの心よるの女人を
見るよりも悲し

めん鶏ら砂あび居たれひとつそりと剃刀研人は
過ぎ行きにけり
七月二十三日五首

夏休^{なつやすみ}日^ひわれももらひて十日^{とつか}まり汗^{あせ}をながして
なまけてゐたり

たたかひは上海^{しやんはい}に起^{おこ}り居^ゐたりけり鳳仙花^{ほうせんか}紅^{あか}く
散^ちりゐたりけり

鳳仙花^{ほうせんか}かたまりて散^ちるひるさがりつくづくと
われ歸^{かへ}りけるかも

悲報來 大正二年作

七月三十日夜、信濃國上諏訪に居りて、伊藤左千夫先生逝去
の悲報に接す。すなはち予は高木村なる島木赤彦宅へ走る
時すでに夜半を過ぎゐたり。

ひた走るわが道暗^{かみ}ししんと恠^{こら}へかねたる
わが道^{みち}くらし

すべなきか螢をころす手のひらに光つぶれて
せんすべはなし

ほのぼのとおのれ光りてながれたる螢を殺す
わが道くらし

氷室より氷をいだし居る人はわが走る時もの
を云はざりしかも

氷きるをとこの口のたばこの火赤かりければ
見て走りたり

死にせれば人は居ぬかなと歎かひて眠り薬を
のみて寝んとす

赤彦と赤彦が妻吾に寝よと蚤とり粉を呉れに
けらずや

罌粟はたの向うに湖の光りたる信濃のくにに
目ざめけるかも

諏訪のうみに遠白く立つ流波つばらつばらに
見んと思へや

あかあかと朝焼けにけりひんがしの山竝の空
朝焼けにけり

朝螢集

大正二年三年雜歌

ふり灑ぐあまつひかりに目の見えぬ黒き蟬を
追ひつめにけり

まんじゆ沙華さけるを見つつ心さへつかれて
をかの烟こえにけり

きなぐさきあまつひかりに滞れとほり原のく
ほみをあれひとりゆく

ひたぶるにトマト畑を飛びこゆるわれの心の
いきどほろしも

いちはやく湧くにやあらむこの身さへ懺悔の
心わくにやあらむ

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我
が命なりけり

かがやけるひとすぢの道遙けくてかうかうと
風は吹きゆきにけり

はるばるとすぢのみち見はるかす我は女犯
をおもはざりけり

我はこころ極まりて來し日に照りて一筋みち
のとほるは何ぞも

こころむなしくここに來れりあはれあはれ土
の窪にくまなき光

七面鳥ひとつひたぶるに膨れつつ我のまとも
に居たるたまゆら

七面鳥かうべをのべてけたたまし一つの息の
聲吐きにけり

松風が吹きぬたりけり松はらの小道をのぼり
童女と行けば

ほのぼのと諸國修行に行くこころ遠松かぜも
聞くべかりけり

ともしびの心をほそめて松はらのしづかなる
家にまなこつむりぬ

ゆらゆらと朝日子あかくひむがしの海に生れ
てゐたりけるかも

東海の渚に立てば朝日子はわがをとめごの額
を照らす

橡の太樹をいま吹きとほる五月かぜ若葉たふ
とく諸向きにけり

しまし我は目をつむりなむ眞日おちて鴉ねむ
りに行くこゑさこゆ

この夜は鳥獸魚介もしづかなれ未練もちてか
行きかく行くわれも

ひと夜ねしとのゐの朝の疊はふ蟲をころさず
めざめごころに

朝明けてひた怒りをる狂人のこゑをききつつ
疑はずけり

かへるごは水のもなかに生れいでかなしきか
なや浅岸に寄る

あかねさす晝の光の尊くておたまじやくしは
生れやまずけり

まんまんと満つる光に生れゐるおたまじやく
しの目は見ゆるらむ

くろぐると命みじかく寄りあへるおたまじやく
くしをしまらくは見む

足^{たら}乳^ち根^ねの母^はに連^つれられ川^な越^こえし田^た越^こえしこと
もありにけむもの

草^{くさ}づたふ朝^{あさ}の螢^{ほたる}よみじかかるわれのいのちを
死^しなしむなゆめ

朝^{あさ}どりの朝^{あさ}立^たつわれの靴^{くつ}下^{した}のやぶれもさびし
夏^{なつ}さりにけり

われ起^おきてあはれといひぬとどろける疾^{はや}風^ちの
なかに蟬^{せみ}は鳴^なかざり

家^あ鴨^鴨らに食^はみ残^{のこ}されしダアリアは暴^あ風^{らし}の中^{なか}に
伏^ふしにけるかも

疾^{はや}風^ち來^くと竹^{たけ}のはやしの鳴^なる音^ねの近^{ちか}くにきこゆ
臥^ふりつつをれば

はつはつに咲きふふみつあしびきの暴風に
ゆるる百日紅のはな

油蟬いま鳴きにけり大かぜのなごりの著るき
百日紅のはな

日向葵は諸伏しゐたりひた吹きに疾風ふさ過
ぎし方にむかひて

ゆふぐれの海の淺處にぬばたまの黒牛疲れて
洗はれにけり

ゆふ渚も言はぬ牛つかれ来てあたまも専ら
洗はれにけり

日のもとの入江音なし息づくと見れど音こそ
なかりけるかも

にちりんは白くちひさし海中に浮びて聲なき
童子のあたま

さんごじゆの大樹のうへを行く鴉南なぎさに
低くなりつもの

みづゆけば根白高萱かやむらは濡れつつ蟹を
寝しむるところ

いくたりも人いで来りゆふ待ちて海の薬草に
火をつけにけり

入日には金のまさごの揺られくる小磯の波に
足をぬらす

旅を来てかすかに心の澄むものは一樹のかげ
の蒟蒻ぐさのたま

ひたぶるに海豚はふくれて水のうへありのま
まなる命死にゐる

片山かげに青々として畑あり時雨の雨の降り
にけるかも

山峽に朝なゆふなに人居りてものを言ふこそ
あはれなりけれ

山こえて片山かげの青畑ゆふべしぐれの音の
さびしさ

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく
降りにけるかも

山ふかく遊行をしたり假初のものとなおもひ
山は遠しも

ひさかたのしぐれふりくる空さびし土に下り
たちて鴉は啼くも

しぐれふる峽にいりつつうつしみのともしび
見えず馬のちとすも

現身はみなねむりたりみ空より小夜時雨ふる
この寒しぐれ

かんかんと椽の太樹の立てらくを背向にしつ
つわれぞ歩める

ふゆ原に繪をかく男ひとり来て動くけむりを
かきはじめたり

ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子
坂のぼりつつ

冬夜集

大正四年雜歌

ひとむらとしげる竹むら黄に照りてわれのそ
がひに冬日かたむく

うつし身はかなしきかなや篁の寒きひかりを
見むとし思ふ

日のひかりの隈なきに眠る豚ひとつまなこを
ひらく寂しとぞいはむ

あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき
力おもはざらめや

こらへぬし我のまなこに涙たまる一つの息の
朝雉のこゑ

朝あさ森もりにかなしく徹とほる雉き子このこゑ女をんなの連つれをわれ
おもはざらむ

尊たふとかりけりこのよの曉あかつきに雉き子こひといさに悔く
しみ啼なけり

大おほ戸とよりいろ一いち様やうの著き物ものさてもものぐるひの群むね
外そと光ひかりにいづ

真ま夏なつ日ひのひかり澄すみ果はてし淺あさ茅ち原はらにそよぎの
音おとのきこえけるかも

まかがよふ淺あさ茅ちが原はらのふかさ晝ひるむかうの土つちに
豚ぶたはねむりぬ

墓はか地ちかげに機き關くわん銃じゆうのちとけたたましすなはち
我われは汁じゆのみにけり

たらたらと漆の木より漆垂りものいふは憂き
夏さりにけり

ぎばうしゆに愛しき小花むれ咲きて白日光に
照され居たり

いそがしく夜の廻診ををはり来て狂人もりは
蚊帳を吊るなり

狂人に親しみてより幾年か人見んは憂き夏さ
りにけり

くれなるにひらめく火立を真晝間の渚の砂に
見らくし悲し

まかがよふ晝のなぎさに燃ゆる火の澄み透る
まのいろの寂しさ

すき透り低く燃えたる濱の火にはだか童子は
潮にぬれて來

旅を來て大津の濱に晝もゆる火炎のなびき見
すぐしかねつ

みちのくの勿來へ入らむ山がひに梅干ふふむ
あれとあがつま

みちのくへあが嬌をやりて足引の山の赤土道
あれ一人ゆく

みちのくに近き驛路日はくれて一夜ねむると
ねむりぐすり飲む

平潟へちかづく道に汗は落つ捨身あんぎやの
我ならなくに

眉ながき漁師のこゑのふとぶとと泊てたる舟
にもものいひにけり

松並木の松ふとりつつ傾けり鉛のごとくうみ
曇る見ゆ

墜道のなかに牛立つ日のくもりわれ疲れつつ
來りけるかも

祖母

大正十四年
録三十四首

おのづからあらはれ迫る冬山にしぐれの雨の
降りにけるかも

もの行とどまらめやも山峽の杉のたいぼく
の寒さのひびき

まなかひにあかはだかなる冬の山しぐれに濡
れてちかづく吾を

いのちをはりて眼をとぢし祖母の足にかすか
なる輝のさびしさ

命たえし祖母のかうべ削りたまふ父を圍みし
うからの目のなみだ

蠟の火のひかりに赤しおほははの棺のうへの
太刀鞘のいろ

朝あけて父のかたはらに食す飯ゆ立つ白氣も
寂しみて食す

さむざむと曉に起き麥飯をおしいただきて食
ひにけり

ゐろりべにうれへとどまらぬ我がまなこ煙は
かかるその渦けむり

あつぶすま堅きをかつきねむる夜のしばしば
覺めて悲し霜夜は

日の入のあわただしもよ洋燈つりて心がなし
く納豆を食む

土のうへに霜いたく降り露なる玉菜はじけて
人音もなし

おほははのつひの葬り火田の畔に蝉も鳴かぬ
霜夜はふり火

終列車のぼりをはりて葬り火をまもる現身の
しはぶきのあと

愁へつつ祖母はふる火の渦のしづまり行きて
曉ちかからむ

ふゆの日の今日も暮れたりゐるるべに胡桃を
つぶす獨語いひて

冬の日のかたむき早く櫟原こがらしのなかを
鴉くだれり

ここに來て心いたいたしまなかひに迫れる山
に雪つもる見ゆ

いただきは雪かもみだる眞日くれてはさまの
村に人はねむりぬ

山がはのたぎちの響みとどまらぬわぎへの里
に父老いにけり

あしびきの山こがらしの行く寒さ鴉のこゑは
いよよ遠しも

はざまなる杉の大樹の下闇にゆふこがらしは
葉おとしやまず

時雨ふる冬山かげの湯のけむり香に立ち來り
ねむりがたしも

棺のまへに蠟の火をつぐ夜さむく一番どりは
鳴きそめにけり

むらぎもの心もしまし落るたり落葉のうへを
黒猫はしる

冬の山に近づく午後の日のひかり干栗の上
に
蠅ならびけり

ぢりぢりとゐるりに燃ゆる櫛の樹の太根はつ
ひにけむり擧げつも

おほははのつひの命にあはずして霜深き國に
二夜ねむりぬ

せまりくる寒さに堪へて冬山の山ひだにいま
陽の照るを見つ

きのこ汁くひつつおもふ祖母の乳房にすがり
て我はねむりけむ

稚くてありし日のごと吊柿に陽はあはあはと
差しゐたるかも

あら土の霜の解けゆくはあはれなり稚きとき
も我は見にしが

ふるさとに歸りてくれれば庭隈の鋸屑の上にも
霜ふりにけり

夕されば稻かり終へし田のおもに物の音こそ
なかりけるかも

浅茅集

大正五年雜歌

街かけの原にこほれる夜の雪ふみゆく我の咳
ひびきけり

夜ふけてこの原とほること多しこよひは雪も
こほりけるかも

原のうへに降りて冴えたる雪を吹く夜かぜの
寒さ居るものもなし

さ夜なかと夜はふけにけり冴えこほる雪吹く
風のおとの寂しさ

こほりたる泥のうへ行くわがあゆみ風邪のな
ごりの身にしひびけり

夜の最中すでに過ぎたりけたたまし軍雞の濁
ごえをひとり聞き居り

さむざむと寝むとおもへど一しきり夜のくだ
かけの長啼くを聴く

夜ふかし寝つかれなくに来しかたのかなしき
心よみがへり来も

三宅坂をわれはくだれり嘶かぬ裸馬もひとつ
寂しくくだる

ひよろ高き外人ひとり時のまに我を追ひ越す
口笛ふきつつ

小野の土にかぎろひ立てり眞日あかく天づた
ふこそ寂しかりけれ

うつしみは悲しきものか一つ樹をひたに寂し
く思ひけるかも

人ごみのなかに入りつつ暫しくは眼を閉ぢむ
このしづかさや

寂しかる命にむかふ土の香の生は無しとぞ我
は思はなくに

あなあはれ寂しき人の浅草のくらき小路にマ
ツチ擦りたり

現身は現身ゆゑにこころの痛からむ朝けより
降れるこの春雨や

途中にて電車をくだるひしひしと遣らふ方な
き懺悔をもちて

うつつなるほろびの迅さひとたびは目ざめし
鶏もねむりたるらむ

あまがへる鳴きこそいづれ照りとほる五月の
小野の青さなかより

五月の陽てれる草野にうらがなし青蛙ひとつ
鳴きいでにけり

さつき野の草のひかりに鳴く蛙
こころがなし
く空にひびけり

青がへるひかりのなかになくこゑのひびき
徹りて草野かなしき

五月野の浅茅をてらす日のひかり
人こそ見え
ね青がへる鳴く

さびしさに堪ふるといはばたはやすし
命みじ
かし青がへるのこゑ

梅の木かげのかわける砂に蟻地獄
こもるも寂
し夏さりにけり

夜おそく電車のなかに兵ひとり
しづかに居る
は何かさびしき

垢づきし瘋癲學に面よせてしましく讀めば夜
ぞふけにける

夜は暗し寝てをる我の顔のべを飛びて遠そく
蠅の寂しさ

ひたぶるに暗黒を飛ぶ蠅ひとつ障子にあたる
音ぞきこゆる

眞日あかく傾きにけり一つ樹のもとに佇ずむ
徒歩兵ひとり

狂院に宿りに來つつうつうつと汗かきをれば
蠅鳴けり

いささかの爲事を終へてころよし夕餉の蕎
麥をあつらへにけり

土曜日の宿直のころ獨りゐて煙草をもはら
吸へるひととき

蝸は一とき鳴けり去年ここに聞きけむがごと
こゑのかなしき

卓の下に蚊遣の香を焚きながら人ねむらせむ
處方書きたり

老いたまふ父のかたはらにめざめたり朝蝸の
むらがること(1) 故郷。吾妻山。録十四首。

額よりながれし汗に日に焼けし結城哀草果は
わが側に居り(2)

うらがなしき朝蟬のこゑの透れるをわぎへの
さとに聞きにけるかも(3)

ふるさとの藏の白かべに鳴きそめし蟬も身に
沁む晩夏のひかり(4)

現身の聲あぐるときたたなはる岩代のかたに
山反響すも(5)

山がひにおきな一人ゐる山刀おひて吾妻の山を
みちびきのぼる(6)

吾妻峰を狭霧にぬれて登るときつがの木立の
枯れしを見たり(7)

梅干をふふみて見居り山腹におしてせまれる
白雲ぞ疾き(8)

あきふせる目下むらやま天つ日の照りてかけ
らふ時のまを見つ(9)

あづまやまの谿あひくだる硫黄ふく南疾風に
むかひてくだる(10)

いましめて峽をめぐれりまながひのあかはだ
かなる山に陽の照る(11)

くたびれて息づき居ればはるばると硫黄を負
ひて馬くだるなり(12)

火口よりとほぞさしときあかあかと鋭き山は
あらはれにけり(13)

吾妻山くだりくだりて聞きつるはふもとの森
のひぐらしのこゑ(14)

*
**

寒蟬集

大正六年雜歌

おもかげに立ちくる君や辛痛しとつひに言ひ
けむか寒き濱べに(1) 長塚節忌。録八首。

まをとめをかなしといひて風さむき筑紫の濱
に君死しにけり(2)

こころ凝りていのち生きむと山川を海洋をこ
えて行さし君はや(3)

まながひた立ちくる君がおもかげのたまゆら
にして消ゆる寂しさ(4)

山がはのこもりてとよむながれにもかなしき
いのち君まもりけむ(5)

山がひのうつろふ木々のそよぎにも清し光を
君見けむもの(6)

生きたしとむさぼり思ふな天つ日の落ちなむ
ときに草を染むるを(7)

しらぬひ筑紫を戀ひて行きしかど濱風さむみ
咽に沁みけむ(8)

なまけつつ居りと思ふな明暮をい行き還らひ
その夜ねむるに(1)酬赤彦録八首。

悲しさを歌ひあげむと思へども茂太を見れば
こころ和むに(2)

昨夜もねむり足はず戸をあけて霜の白さに
あどろきにけり(3)

無沙汰ぶさたしてかなしけれども落ちぬざるところ
をもちてけふも暮るるを(4)

よるふけてにほり鶏にほりなくにいまだ寝ねず電車でんしゃのおとも
なくなりにけり(5)

いとまあるわれとおもふないちじろく幽かかに
人の死ひにゆくを見みつ(6)

あつぶすまかつぎてぬれどわがころ疲つかれや
しけむねむりがたしも(7)

なりはひのしげく生いくればあはれなる歌うたなか
りけりとがむるなゆめ(8)

もの戀こひしく電車でんしゃを待まちてり塵ちりあげて吹ふきとほる
のいたく寒さむしも

をさなごを心にもちて歸りくる初冬のちまた
夕さにけり

かわききりたる直土に氷に凝るひとむら雪を
をさなごも見よ

秩父かぜおろしてきたる街上を牛とほり居り
見すぐしがたし

この目ごろ人を厭へうをさなごの頭を見れば
こころゆらくを

七とせの勤務をやめて街ゆかず獨りこもれば
晝さへねむし

ひさびさに外にいづれば泥こほり蹄のあとも
心ひきたり

をさなごの頬の凍風をあはれみてまた見にぞ
來しをさな兩頬

春の陽は空よりわたるひとりゐて心寂しめば
くらさがごとし

むらぎものゆらぎ泳へてあたたかさ飯食みに
けりものもいはなく

ひむがしの空よりつたふ春の日の白き光にも
馴れし寂しさ

おのづからねむりもよふすひるごもり障子の
やれに風ふきひびく

光る日の嚴くしさにも馴れくれば疑はずけり
春の日のぼる

もの投げてこゑをあげたるをさなごをこころ
虚しくわれは見がたし

ひたぶるにあそぶをさなごの額より汗いでに
けり夏は來向ふ

かりそめの病に籠りをさなごを我がかたはら
に遊ばせにけり

をさなごの去りたるあとに散らばれるものを
見つめてしまし我が居り

ものぐるひの診察に手間どりてすでに冷たき
朝飯を食む

こもらへば裏町どほりの遠近に壘をたたく音
のさびしさ

うつうつと空は曇れり風ひけるをさなご守り
て外に行かしめず

墓原のかげよりおこる銃のおとわが向つへの
窓にこだます

ひとときの梅雨の晴間にさ庭べの軍雞の羽ば
たき見てゐるわれは

硝子ごしむかひに見ゆる栗の木の栗の白花す
ぎにけるかも

をさなごは疊のうへに立ちて居りこの穉兒は
立ちそめにけり

へやに歸り何もせず居りにはとりの長鳴鳥が
さほひ鳴くはや

くもりぞら電柱のいただきにともりたる光は
赤く晝すぎにけり

みちのくの病みふす友に書かくとしばし心を
落つけにけり

日日にあわただしさのつりきて晩夏の街を
われは急げり

むらぎもの心はりつめしましくは幻覺をもつ
をとこに對す

馬追は庭に來鳴けり心ぐし溜りし爲事いまだ
はたさず

さるすべりの木の下かげにをさなごの茂太を
率つつ蟻をころせり

電燈の光とどかぬ宵やみのひくき空より蛾は
とびて來つ

ものさびしく室に居りつつみちのくの温泉街
の弟おもへり

晩夏の月あかき夜に墓地あひの細さとほりを
行きて歸るも

いらただしもよ朝の電車に乗りあへるひとの
ことごと罪なきごとし

晩夏のひかりしみ入れり目のまへの石垣面の
しろき大石

跳ねてこし黒き蟬ひとめみむ時の間もあらめ
はじきとばせり

うらさびしき女こんなにあひて手の甲かぶの静脈じやうみやくまもる
朝あさのひととき

おもおもと曇くもりて暑あつき坂下さかしたに竝ならみてたたずむ
鐵てつはこぶうま

夜よふけて久ひさしとおもふにわが臥ふせる室むろのそと
道みちをとほる人ひとあり

兵營へいえいのねむりの喇叭らふしとしとと降ふり居ゐる雨あめの
なかよりきこゆ

晩夏ばんかのひかりしみとほる見附みつけしたむさむさに
電車でんしゃ停電ていでんし居ゐり

しづかなる午後ごごの日ひざかりを行ゆきし牛坂うしざかのな
かばを今いましあゆめる

うつうつと暑さいさるる病室の壁にむかひて
男もだせり

寒蟬は鳴きそめにけりなりはひのしげく明け
くれて幾日か経たる

あかときははいまだをぐらしさむざむとわがま
ぢかくに馬追なけり

箱根。長崎。

大正六年。

ちり亂るる峡間の木の葉さぞの夜のあらしの
雨に打たれけるかも 箱根漫吟。録十一首。

かみな月十日山べを行きしかば虹あらはれぬ
山の峡より

目のもとふかき峽間は朝霧の満ちの湛へに
飛ぶ鳥もなし

たたなづく青山の秀に朝日子の美のひかりは
さしそめにけり

石の間に砂をゆるがし湧く水の清しきかなや
我は見つるに

宵ごとに灯ともして白き蛾の飛びすがれるを
殺しけるかな

しづかなる砂地あはれめりひたぶるに大き石
むれてあらし川原に

暗谷の流の上を尋めしかばあはれひとところ
谷の明るさ

この深き峽間の底にさにづらふ紅葉ちりつつ
時ゆきぬらむ

この世のものと思へど遙にてこだま相とよむ
谿に來にけり

いにしへの碓氷峠ののぼり路にわれを恐れて
飛ぶ小鳥あり

いつしかも寒くなりつつ長崎へわが行かむ日
は近づきにけり
「長崎へ」録十二首。

目の前のいらかの上に白霜の降れるを見れば
つひに寂しき

ひたぶるに汽車走りつつ富士が根のすでに小
きをふりさけにけり

おもおもと雲せまりつつ暮れかかる伊吹連山
に雪つもる見ゆ

西ぞらにしづかなる雲たなびきて近江の海は
暮れにけるかも

佐賀驛を汽車すぐるとき灰色の雲さむき山を
しばし目守れり

さむざむとしぐれ來にけり朝鮮に近き空より
しぐれ來ぬらむ

長崎のみなとの色に見入るとき遙けくも吾は
來りけるかも

あはれあはれここは肥前の長崎か唐寺の菫に
ふる寒き雨

しらぬひ筑紫の國の長崎にしはぶきにつつ一
夜ねにけり

しづかなる港のいろや朝飯のしろく息たつを
食ひつつおもふ

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし
竝みよるふ山

卷末の小記

○ 歌集「朝の螢」は、私のはじめての自選集である。私の選集には、大正五年ごろ抒情詩社から出た「齋藤茂吉」がある。これは、内藤銀策君が選んで呉れた。次いで、大正十年ごろアルスから出た「茂吉選集」がある。これは、北原白秋君が選んで呉れた。そして、二つとも今は版が絶えてゐる。かくの如く、私の選集は皆友の手によつて選ばれた。何々一萬歌集、何々名歌選、さういふ似よりの歌集中に私の歌が抜かれて載つてゐるのも、みな友の手によつて選ばれたものである。然るに、「歌集「朝の螢」は私みづからそれを選んだ。

○ 自分の歌を自分で選ぶといふことは、容易なるが如くであつて實はむづかしい。特に、選ぶべき歌の數に制限のある場合にこの困難は著しい。然

るに私は、歌集「朝の螢」を比較的容易に選び了へた。私は數年歐羅巴に留學して、その間自分の歌に親しむ機會をなくしてゐた。さて歸國して久しぶりにて自分の歌を讀んでみると、それは私には盡く一種の疎き響をもつてゐた。すなはち、自分のものではないやうな氣がした。茲に於て私は、歌集「朝の螢」を比較的容易にそして一氣呵成に選び得たものではなからうか。

○
かくの如き状態に於て、私は歌集「朝の螢」を選んだ。加ふるに私は、歸國以來ここに深い痛手を負つて、その創痕がいまだに癒ゆるいとまがない。私は秘かに思ふ。歌集「朝の螢」は如是のころの状態と不可斷不可斷の關聯に立つてゐるのではあるまいか。それならば、願はくはすみやかに私に平安のころの状態を與へたまへ。そのころの状態に於て、私はもう一つの自選歌集を選びうるであらう。かくの如くにして私は、二とほり、三とほりの自選歌集をつくり得るであらう。けれども、歌集「朝の螢」は私のこ

ろの悲しく痛ましき時につくり得たものである。縁ありて、この歌集を讀む友よ、ねがはくは如是のゆゑよしを忘れたまふな。

○
歌集「朝の螢」の歌は、歌集「赤光」あらたまの歌より選んだ。そして「赤光」より百首、「あらたま」より二百五十餘首、合せて三百五十餘首の割合である。大正元年以前の歌を棄てたのは、選歌の數に大凡の約束があつたためである。大正七年以後、私が長崎に行つてから、大正十四年私が歸朝するまでの歌は、この選集には收めてゐない。いろいろの訣合から、この選集に收めることをはばかつたのである。かくの如く約六年間の歌を私はこの選集に收めたいに過ぎないけれども、おほよそ私の歌風の特徴をうかがふことが出来るとおもふ。私が長崎に轉住した大正七年以後、それから私が横濱から船出した大正十年以後、日本の歌壇はどしどし進歩したやうな氣がする。これをおもふごとくに私は一種のうらさびしきをおぼえるけれども、大正六年に、

運つたなくして私が死んでしまつたとおもへば實はなんでもない。

○ 歌集に「朝の螢」と名づけたのは、ゆゑあるのではない。私の歌、草づたふ朝の螢よみじかかゝるわれのいのちを死なしむなゆめ。に本づいてゐる。歌は大正三年の制作に係つてゐる。この歌は舊作であるけれども、なにがなし此の歌を私はあはれに思ふ。

○ 六年の間に歩んだ私の道にはいろいろの曲折があつた。この道は細いけれども、みづから拓いたものである。私はへりくだつてなほこれをいふけれどもかへりみて忸怩たるものがあるのは何ゆゑであるか。私はつひに歌道に於ける多力者ではないからである。

しろがねの雪ふる山に人かよふ細々として路みゆるかな(大正元年作)
朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし竝みよるふ山(大正六年)

作)

試に、巻頭巻末の二首をこゝに抽出した。前者は故郷の山形縣にて咏んだものであり、後者は長崎醫學専門學校に赴任したときに咏んだものである。二つを較べると進歩のあととはかくの如くに遅々としてゐる。かくの如くたどたどとしてゐるけれども、「實相觀入」の實行を私はここまで進めて來たことは、私のかすかなる慰安である。これをしも世の人々は、果敢なき豪語に過ぎぬと評して去るであらうか。

○ ぶりそそぐあまつひかりに目の見えぬ黒きいとどを追ひつめにけり
ゆふ渚ものいはぬ牛つかれ來てあたまもはら洗はれにけり

まんまんと滿つる光にうまれゐるおたまじやくしの目は見ゆるらむ
かういふやうなのが、大正二年、大正三年ごろの歌にある。作つた當時には相當に得意でゐたやうにもおぼえてゐる。それから「あらたま」を編むと

き、かういふ種類の歌を厭味に感じて困つたやうにもおもふ。併し今、自分の歌を通覧すると、かういふ歌も相當に興味がある。特に、當時の歌壇を景にして讀むと、まんざら棄ててしまはなくともいいやうな氣もする。この選集には、この種類の歌も幾つか選んでおいたとおもふ。

○

あまざらし雪ふる見れば飯を食ふ囚人のころわれに湧きたり
のど赤き玄鳥ふたつ梁にゐてたらちねの母は死にたまふなり
いちはやく湧くにやあらむこの身さへ懺悔のころ湧くにやあらむ
山ふかく遊行をしたり假初のものとのおもひ山はふかしも
尊かりけりこのよの曉に雉子ひといきにくやしみ啼けり
しまし我は目をつむりなむ眞日おちて鴉ねむりに行くこゑきこゆ
この夜は鳥獸魚介もしづかなれ未練もちてか行きかく行くわれも
かういふやうな種類の歌が、集中とところどころにある。成心してこの種

類の歌を拾へば、まだまだ幾らでもあるであらう。詩には、思想といふことを露はに出すものではないとデエメルが云つてゐる。それが短歌になると、なほなほむづかしいといふことが分かる。そんなら、短歌には全く思想、哲學、人生觀が無いのであらうか。私の上の如き一群の歌は、この間に幾分答ふるであらう。短歌は抒情詩である。そして短歌は實相に觀入して成るものである。哲學者の語録と、私の短歌と、そこに奈何の差別があるかといふことを誰かが注意をして呉れるであらう。そして、私が常に力説してゐる「寫生」といふことにも、世の人々は少しく注意して呉れるであらう。

○

もの行とどまらめやも山峽の杉のたいぼくの寒さのひびき
はざまなる杉の大樹の下闇にゆふこがらしは葉おとしやまず
ここに來て心いたいたしまながひに迫れる山に雪つもるみゆ
冬の日のかたむき早く襟原こがらしのなかを鶺鴒くだれり

大正四年「祖母」といふ幾つかの歌を作つたときこんな歌も作つた。これは寒國の風景に過ぎないやうであるけれども、當時私は實に心を續めて是等の歌を作つた。それゆゑ、是等の歌は謂はば私の心の象徴であると謂つて好い。世にはこれまでも象徴的歌と唱ふるものがいろいろ出た。しかしそれらの歌と私の歌とはちがふ。私は常に寫生の説を唱へてゐる。そして、直に寫生をすれば、おのづから象徴の域に到るものであると信じてゐる。世の象徴歌を論ずるものは、是等の歌をも少しく顧慮するといふ。

小野の土にかぎろひ立てり眞日あかく天づたふこそ寂しかりけれ
眞夏日のひかり澄みはてし浅茅原にそよぎの音のきこえけるかも
ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも
ふるさとの藏の白かべに鳴きそめし蟬も身に沁む晩夏のひかり
まかがよふ書のなぎさに燃ゆる火の澄みとほるまの色さびしき
かくの如き一群の歌もある。かういふ靜かな、澄んでしいんとしてゐる

やうな風景の歌は、むかしならば、幽玄乃至有心の體である。今ならば象徴的歌である。けれどもさう樂に評し去らぬが好い。私の是等の歌は、縦しんば下等であつても、これは寫生の歌である。それゆゑ、是等の歌はおのづから象徴歌になつてゐるであらう。若しなつてゐなければ、いまだ寫生力が足りないのである。

みちのくの我家の里に黒き蠶が二たびねぶりめざめけらしも
うけもちの狂人も幾たりか死にゆきて折々あはれを感じるかな
身ぬちに重大を感じざれども宿直のよるにうなじ垂れるし
ひたぶるに暗黒を飛ぶ蠅ひとつ障子にあたる音ぞきこゆる。

こんな種類の歌もある。私は無造做に抽抜いたが、いつぞや、生活歌といふものが唱道されたことがあつた。さういふ歌を唯一の信條とする人々でも、私の是等の歌ならば、幾らか讀むに堪ふるであらう。ただ私の歌は萬

葉調であるから、無遠慮に古語なども使つてゐる。そのへんが違ふ。それから「暗黒」「重大」などの文字もある。舊根岸短歌會同人の歌にはなかつたものである。

○
しづかなる午後ごごの日ざかりを
行きし牛坂うしざかのなかばを
今し歩める
ひさびさに外にいづれば泥どろこほり
蹄ひづめのあとも心ひきたり
もの投げてこゑをあげたるを
さなごをこころ虚むなしくわれば見がたし
墓原むらばのかげより
こる銃てつのおとわが向むかつへの窓まどに
こだます
むらぎもの心はりつめしましくは
幻覺げんかくをもつをとこに對たいす
電燈でんとうの光とどかぬ宵よやみのひくき
空より蛾がはとびて來つ
いらただしもよ朝の電車に
乗りあへるひとのことごとく
罪なきごとし
是等は大正六年の作で、集中にあつても、最も新しい作に屬してゐる。このあたりになると、大正二年、大正三年あたりの歌とは、餘程ちがつてゐるや


うに作者自身の私にも思へる。私は、大正六年ごろはかういふ方嚮に進まうとしてゐたことが分かるけれども、是等の歌風を境界として私は長崎へ立たなければならなかつたのであつた。

ちりみだるゝ峽間せきまの木の葉きぞの夜のあらしの雨に打たれけるかも
石の間に砂をゆるがし湧く水の清すがしきかなや我は見つるに
宵ごとに灯ともして白き蛾の飛びすがれるを殺しけるかな
暗谷のながれのかみをとめしかばあはれひとところ谷の明るさ
西ぞらにしづかなる雲たなびきて近江の海は暮れにけるかも
さむざむとしぐれ來にけり朝鮮に近き空よりしぐれきぬらむ

かういふ叙景歌もある。大正六年ごろはかういふ叙景歌へ進みつゝあつたやうにおもはれる。この選集は、制作の年代順に歌を描へたから、かくの如く私の進んで來た歌の道の曲折をも大凡見ることが出来ると思ふ。

以上の如く、私は自分の歌に就いて、すでに論議にわたる言辭を弄した。これは作者自身にとつて稍らしるめたき點である。けれども纏つておもふに自選歌集はすでに、自讃歌集である。この自惚おぼろがなくんば、誰か自選歌集をつくり得よう。茲に於て、私はなほ進んで自分の作に就いて論議にわたる一文を草した。自讃歌集の名をはつきりさせんがためである。

あれほど苦勞して、これだけの歌しかないのは、いかにも寂しい、悲しいなといふのは、作者自身の私事内證わたくしごとごとであつて、自選歌集を編むこととは別の、別の別の問題である。世の人々は私を指して『滑かなるくちびると大なる言ことをかたる舌』などと云ひたまふな。大正十四年三月廿六日夜半。童馬山房燒跡にて。齋藤茂吉しるす。

發 兌		大正十四年四月十八日印刷 大正十四年四月二十日發行
		<p>朝の聲 定價壹圓五拾錢</p>
	著者	齋藤茂吉
	發行者	山本美
	印刷者	石川金太郎
	改造社	東京市芝區愛宕下町一丁目一番地 電話東京八四〇二番 高輪四九九三番

株式會社英秀印所刷

集		歌		選		自	
木下利玄著	釋 迢空著	中村憲吉著	古泉千樞著	烏木赤彦著	齋藤茂吉著		
立	海やまのあひだ	松の芽	川のほとり	十年	朝の螢		
送料	定 價	送料	定 價	送料	定 價	送料	定 價
・二六	一・八〇	・二六	一・八〇	・二六	一・五〇	・二六	一・五〇

八木書店古書部

東京

電